

# 太宰治『人間失格』における「罪」について

工藤友梨

## 序論

『人間失格』は、太宰が心中により死去する昭和二十三年に書かれ、発表された作品である。主人公である大庭葉蔵の人生と太宰の人生は、非常に接点が多く、この作品を書いた後に心中していることを考えると、自分の人生を綴った遺書とも受けとることができる。では太宰は、人生を『人間失格』に託して描くことで何を伝えようとしていたのだろうか。

私が疑問に思ったのは、太宰は何故、わざわざ葉蔵を人間失格となってしまう立場に置いたのかである。書こうと思えば幸せな終末を書くこともできたはずであるが、『人間失格』をそう描かなかったのは、葉蔵を破滅的に描くことに意味があったからであろう。ではどういった意味があったのか。私は作品中に見られる「罪」の意識に注目する。作品中には、「罪」のアントニム（対義語）の当てっこをする場面の他に、「罪」を連想させるような場面や文章が多く見受けられる。だが、具体的に「罪」とは何であるかは明かされないまま、作品は幕を閉じてしまうのである。

太宰の生涯を追ってみると、「罪」の意識と繋がるような要因や事件が幾つか存在しており、それは彼の文学に深く影響している。『人間失格』が太宰の遺書であるならば、この作品で「罪」について書いておきたかったのではないだろうか。そして作品において「罪」が一体何を意味しているのかは、主人公である葉蔵や、彼と関わる女性たち、そして世間の人間について考察すれば分かるのではないだろうか。

## 第一章 「罪」の背景

主人公である葉蔵と太宰には多くの共通点が存在するため、太宰自身の人生を無視して『人間失格』における「罪」について考えることはできない。そのため、まず、太宰自身の人生において、「罪」についての背景になるような要素を挙げる。

一つは太宰の生い立ちである。家族の中で余計者であるという意識、愛情を注いでくれなかった両親、そして一家だけが不当に恵まれている、という家庭環境が太宰の思想の根底に存在し、彼の性格形成に影響したと考えられる。

もう一つは裏切りである。太宰は左翼運動の同志、生家、心中した女性と裏切りを繰り返した。「殆ど他人には満足に口もきけないほどの弱い性格<sup>1)</sup>」である太宰にとって、度重なる裏切りは大きな衝撃となり、「罪」の意識を膨らませてしまったのではないだろうか。

最後にキリスト教と聖書である。聖書と出会って以降、太宰の作品には聖句が引用されるようになった。更に山岸外史の『人間キリスト記』や亀井勝一郎の『生けるユダ』などの作品に触れることにより、裏切り者であるユダのような生き方へと繋がっていくこととなった。そして、「罪」の意識がはっきりと表れたのが『人間失格』であったのである。

## 第二章 『人間失格』の主要人物

三つの「罪」の背景を持つ太宰が描いた『人間失格』では、「罪」の意識はどのように描かれているのだろうか。第二章では作品の主要人物を挙げ、どのような役割を演じているのか分析する。

主人公である大庭葉蔵は、太宰自身と非常に共通点が多く、太宰の分身とも言うことができる。葉蔵は世間の人間の営みというものが理解できず、人とほとんど会話もできなかつたが、道化を考え出し、その一線で僅かに人間と繋がることができた。葉蔵は、世間の人間の生活を「互いにあざむき合って、しかもいずれも不思議に何の傷もつかず、あざむき合っている事にさえ気がついていないみたいな、実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信<sup>2</sup>」が充満しているものと考えている。人間が他人との関係を保っていくためには本音と建前が必要であり、常に相手への欺きが存在している。葉蔵は自分が相手を欺いていることに気がついており、「あざむき合っているながら、清く明るく朗らかに生きている、あるいは生き得る自信を持っているみたいな人間が難解<sup>3</sup>」であった。故に世間の人間の生活の中に入ることができなかったのである。

葉蔵に対し、世間の人間として描かれているのが、ヒラメと堀木である。

ヒラメは葉蔵の学校の保証人である。葉蔵に対してはいつも不機嫌であったが、「人間というものはこんなにも簡単に、それこそ手のひらをかえすがごとくに変化できるものか<sup>4</sup>」と述べられているため、以前は態度が異なっていたようである。ヒラメは葉蔵の父のたいこ持ちのような役を勤めていたため、父に対して機嫌良く笑っていたのであろうし、息子である葉蔵にも同様であったのだろう。だが、その態度は父に向けたものであり、葉蔵自身に向けられていたものではなかった。ヒラメが態度を変えたのは、自分の立場を守りたかつたためであって、葉蔵自身には関連がないと考えられる。ここに、世間の人間の本音と建前が窺われる。ヒラメは葉蔵にとって、世間の人間という存在の代名詞的な人物として登場しているのである。

堀木は登場する場面が多く、葉蔵の人生を急転させる存在である。葉蔵の唯一の友人であると言えるが、作品の後半では家の内と外を区別して営んでいる面を見せ、内も外もなく人間の生活から逃げ続ける葉蔵との決定的な違いを見せている。葉蔵と交友しつつも実は彼を軽蔑していたことが伺える場面もあり、一見人間の生活から遊離してしまっているような印象を与えつつも、それは建前としてであり、人間の生活に適用している世間の人間として描かれている。

ヒラメと堀木の他に、葉蔵に友好的な女性も多く登場している。

ツネ子は、生まれて初めて葉蔵の恋心が動いた女性であり、太宰の最初の心中相手となつた田辺あつみに通ずるところが多い。あつみとの心中は、太宰に大きな恥と「罪」の意識を残した。太宰の分身である葉蔵の「罪」の意識も重かつたことが想像される。ツネ子

との心中未遂の後に出会ったのがシヅ子である。シヅ子は作品に登場する女性の中で最も葉蔵に世話を焼いており、道化を演じて人と繋がってきた葉蔵の本質を見抜いているような言動が見受けられる。ツネ子やシヅ子をはじめとして、葉蔵を好いた女性の殆どには彼よりも年上という共通点があるが、唯一年下であったのがヨシ子である。「無垢の信頼心」を持つ「信頼の天才」であるヨシ子は、人間を恐怖する葉蔵が唯一頼みにしている存在であった。だが「信頼の天才」であるが故に姦通事件を引き起こし、葉蔵を破滅の道へと追いやるきっかけともなってしまった。

### 第三章 『人間失格』における「罪」の問題

葉蔵は、「罪」はどのようなものであると考えていたのだろうか。「罪」について考える時に注目したいのが、葉蔵が「罪のアントニムがわかれば、罪の実体もつかめる」と言っている点である。アントニムとして思い浮かべたのは罰であった。「罪悪のかたまり<sup>5)</sup>」である葉蔵は、「罪」の対義語を明らかにすることによって、「罪」をなくしてくれるものや、代わりになってくれるものを探したかったのではないだろうか。そしてそれを罰に求めたのではないだろうか。犯人意識に苦しめられながら生きている葉蔵は、神の罰だけを信じており、ヨシ子が持っている無垢の信頼心を唯一の頼りとしていた。ヨシ子の姦通事件は、葉蔵にとって、世間の人間からの無垢の信頼心の否定であった。葉蔵が姦通事件の後、急速に破滅の道に向かっていくのは、自身が一番頼りにしていたものを、世間の人間に否定されたからではないだろうか。故に、世間によって徹底的に破滅に追いやられ人間失格になってしまったのである。だが、葉蔵は、本当に人間失格に追いやられてしまうような破滅的存在だったのか。

京橋のバアのマダムとシヅ子は、葉蔵のことを「いい子」「いい人」と言っている。作品中で、葉蔵は自身を卑屈に表現しているが、見方を変えると、彼は非常に優しい人間であると言うことができる。極度に恐れている世間の人間に対して、道化という手段を用いてまで繋がりを持とうとしている。また、自分が悪いのだと思いこんでしまうのも、他人に迷惑をかけないように気を遣ったためだと捉えることができる。葉蔵は優しい人間であるが故に道化を演じ、同時に様々な苦悩を抱えていたのである。では、破滅の人生を歩んだ葉蔵を「いい子」とした太宰の意図は何だったのであろうか。

太宰の意図について考える時、『姥捨』が手がかりになる。この作品の中で表わされている「ユダの悪が強ければ強いほど、キリストのやさしさの光が増す」という考えのもと、太宰は「罪」を持つ葉蔵を悪として書いたとは考えられないだろうか。『人間失格』では、悪である葉蔵を滅ぼしてはいるが、マダムとシヅ子の「いい子」「いい人」という言葉で、葉蔵が悪であるということを覆している。葉蔵が悪ではない立場であるとする、葉蔵と対立する世間の人間の方が悪であるということになり、世間の人間が持つ「罪」が表れてくるのではないだろうか。

## 結論

私は、太宰が『人間失格』で描きたかった「罪」は「欺き」であったのではないかと考える。また、「欺き」のアントニムは「信頼」ではないだろうか。道化を演じ、同時に人を欺くことに苦悩していた葉蔵は、ヨシ子の持つ「無垢の信頼心」に憧れた。その憧れは、裏切りを重ねてしまった太宰自身の憧れでもあったのではないかと。

太宰は、葉蔵を悪として描き、それを覆すことで、世間の人間が抱える「欺き」という「罪」を暴いた。『人間失格』において自身の分身である葉蔵の滅びを描き、世間の「罪」を表した太宰は、自身の死でもってその思想を完成させたのではなかろうか。

---

## 注

- 1 「太宰治全集」第十卷『わが半生を語る』（筑摩書房、1977年、323頁）
- 2 『人間失格』（集英社文庫、2007年、26頁）
- 3 〃（26～27頁）
- 4 〃（85頁）
- 5 〃（150頁）